

濱田先生を偲んで：一つの私的回想[含 略 歴、主要研究業績]

MAKINO, Eiji / 牧野, 英二

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

62

(発行年 / Year)

2005-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007912>

濱田先生を偲んで

—一つの私的回想—

法政大学文学部教授 牧野英二

二〇〇四年九月十日早朝に、濱田義文先生（法政大学名誉教授、元法政哲学会会長、前日本カント協会委員長）は、魂の世界に旅立たれて逝されました。濱田先生が生涯敬愛された哲学者カントの没後二百年の年に、満八十二歳の誕生日を翌月に控えて、先生は静かに息を引き取られました。

この時、筆者は、ドイツ・ボーム大学デルタイ研究所に客員研究員として在外研究中でしたが、幾つかの偶然が重なり、一時帰国してこの日の午後、入院中の先生をお見舞いすることになっていました。しかし、筆者の願ひもむなしく、先生のお元気な姿にお目にかかることもかなわず、永遠の惜別の時を迎えることになりました。

ところで、その後十二月に、福島清紀会長からドイツ滞在中の筆者に対して濱田先生の追悼文の依頼がありました。当初は、在外研究の身であり、他にもふさわしい方がいらつしやることもあって、お申し出を辞退することも考えましたが、濱田先生のご葬儀の折、葬儀委員長を務めさせて戴いた経緯もあり、引き受けさせて戴くことに致しました。そこで、ここでは法政哲学会に深く関わる「一つの私的回想」を綴ることで、濱田先生のお人柄を偲ぶがよすがとなれば、と念じております。

いまから十五年以上前のことでした。その年の春、濱田先生は、在外研究でドイツに出発される予定でし

た。その直前の三月に、筆者は濱田先生から呼び出されました。それは、筆者が委員を務めていた法政哲学会の会長人事についてでした。六月改選の法政哲学会の新会長には、濱田先生が就任されるであろうという見方が当時強くありました。濱田先生も、それを自覚されておられて、年齢的な順序からすれば、次はご自分であるけれども、今回は是非とも加来彰俊先生にお願ひして戴きたいこと、ご自分は加来先生の後でなければ、会長職は引き受けないことなどを強く筆者に念を押されて、まもなく日本を発たれました。

濱田先生が、このようなお考えを吐露されたとき、筆者は少しも驚きませんでした。先生は、常日頃たんに同僚としてだけでなく、それ以上に日本を代表する優れたプラトン研究者として加来先生を深く尊敬されておりました。さらに、法政哲学会の設立にあたって加来先生が大変尽力された経緯も、濱田先生は心に深く留めておられていたからです。その後、日本カント協会の委員長の人事に関しても、同様のことがありました。濱田先生は、つねに全体を冷静に注視され、公平な態度で物事に臨まれておりました。これもまた、先生がカントから学ばれた哲学的な生き方の一つであったと感じております。

昨年十一月にカント没後二〇〇年記念のカント学会の大会が京都大学で開催されました。二〇〇五年十月には日本カント協会が創設三〇周年を迎えます。一昨年病の床に臥されるまで濱田先生は、ご自分が創設に尽力されたカント学会を欠席されたことは、一度もありませんでした。筆者は、昨年のカント学会ほど辛い思いをしたことはありません。本来なら、久しぶりに再会した研究者仲間や先生方とドイツの学会の近況報告に花を咲かせるはずでしたが、今回はまず濱田先生の訃報や最後の時の報告をしなければならなかったからです。それから、すでに数ヶ月が経過しました。しかし筆者の脳裏には、濱田先生あの言葉が焼きついて離れません。「学問は一代にしてならず。牧野君頼むぞ」。

最後に、濱田先生の告別式に感動的な弔辞をお読み下さった加来彰俊先生に、この場をお借りして改めてお礼申し上げます。当日、加来先生は体調不良のなか、無理を押して大阪から都内の葬儀場までお出かけ下さいました。濱田先生もさぞかしお喜びになられたことと推察いたします。筆者にとつても、大きな励まし言葉になりました。筆者は、日本を代表するカント学者とプラトン学者の学恩に浴する僥倖に恵まれた想いを新たにしています。

(ドイツ・ポーフムにて)

濱田義文先生の略歴

濱田先生は、一九二二年十月に中国青島にお生まれになり、旧制第五高等学校卒業後、東京大学法学部及び文学部をご卒業後、母校の熊本大学法学部の倫理学担当教員として赴任されました。また、一九七三年四月に熊本大学法学部より、法政大学文学部哲学科教授として着任され、爾来、文学部では哲学科の専門科目、倫理学概論・哲学演習などの授業とともに、法政大学大学院哲学専攻教授として大学院の修士課程及び博士課程の授業を担当されました。一九九三年三月に、二十年間務められた法政大学文学部教授を定年退職され（同年、法政大学名誉教授）、一九九八年三月には法政大学大学院講師も退職されました。濱田先生は、在職中、本務校の大学院議長・図書館長・評議員等を歴任され、学内行政の上で重責を担われる一方で、法政哲学会会長や、日本カント協会委員長・常任委員、日本倫理学会常任評議員・評議員、日本哲学会編集委員などを歴任され、我が国における斯学の発展と後進の育成に大いに貢献されてきました。

濱田義文先生の主要研究業績

濱田先生の研究領域は、主としてカント哲学、とりわけ倫理学とその形成史に重点が置かれています。まず第一に、『若きカントの思想形成』（勁草書房、一九六七年）と、それに続くカント研究のご著作『カント倫理学の成立』（勁草書房、一九八一年）が挙げられます。前者によって著者のカント学者としての地位を不動のものとし、後者は、博士論文でもあり、斯学の先駆的な研究書として特筆すべき業績として評価されております。さらに、『カント哲学の諸相』（法政大学出版局、一九九四年）は、『純粋理性批判』の成立史研究から、善意志、永遠平和論などのカント哲学の諸相に立ち入り、アダム・スミスとカントとの倫理的対

比の論考から、学部最終講義、多数の翻訳・監修書の解説なども収録された、著者の研究の集大成としての性格を有しています。編著としては『カント読本』（法政大学出版社、一九八九年）や、『近世ドイツ哲学論考』（法政大学出版社、一九九三年）の存在も忘れることができません。

しかし濱田先生のご研究は、カント研究にとどまらず、その視野は広く十七・十八世紀のイギリス思想にも及び、とりわけホッブズ、ロック、ハチソン、シャフツベリ、アダム・スミス等に関する共著・論文が多数あります。具体的には、「イギリス道徳哲学におけるへ注視者への概念」（雑誌『理想』六四七号、一九九一年）や、「イギリス市民社会の倫理」（日本倫理学会編『イギリス道徳哲学の諸問題と展開』所収、慶應通信、一九九一年）等は、先生のイギリス哲学研究の成果の一部に属する論考であります。

濱田先生の学問業績は、カントを中心とした近代倫理社会思想関係の書物の訳業にも窺うことができます。マックス・シェーラー「羞恥と羞恥心」（『マックス・シェーラー著作集』第十五巻所収、白水社、一九七八年）やロシア思想とカントとの関係を初めて本格的に論じた書物、アルセニイ・グリガ『カント』（法政大学出版社、一九八三年）のご翻訳、さらにエルンスト・カッシーラーの名著『カントの生涯と学説』（みすず書房、一九八六年）、ハンナ・アーレント『カント政治哲学の講義』（法政大学出版社、一九八七年）、ロナルド・ペイナー『政治的判断力』（法政大学出版社、一九八八年）、インゲボルク・マウス『啓蒙の民主制理論』（法政大学出版社、一九九九年）等の監修・監訳のお仕事を挙げることができます。